

新潟大学の魅力と現在を発信

新潟大学季刊広報誌

花



NIIGATA UNIVERSITY  
MAGAZINE

— R I K K A —

2014.WINTER [No.7]

新潟大学

授業紹介-教育の現場-

学生の課外活動&サークル紹介

Enjoy! 学生ライフ

シリーズ・対談

注目される研究報告

Campus Information

特集

積極的な学びが視野を広げ人間力を向上させる

アクティブに  
活躍する学生

# 特集

# 積極的な学びが視野を広げ人間力を向上させる アクティブに活躍する学生

新潟大学では、「自律と創生」を全学の理念として掲げています。そんな学風のもと、アクティブに活躍している学生に語っていただきました。

## 02 Voice of Students 専門外の講義も積極的に履修



●栗林菜月さん(法学部4年)

## 01 Voice of Students 多くの人との関わりで充実した学生活動



●松田泰知さん(工学部4年)

## 04 Voice of Students

一步踏み出す決意から  
見えたグローバルな視点



●藤崎夏実さん(法学部4年)

## 03 Voice of Students

意欲的に  
副専攻制度を活用



●鎌田沙穂さん(教育学部3年)

## 06 Voice of Students 自分を再発見したボランティア活動



●塩澤大地さん(人文学部2年)

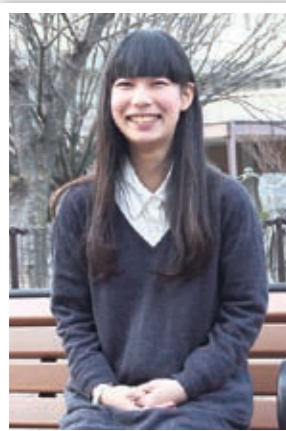
## 05 Voice of Students 主体的な活動で地域振興に貢献



●白井拓己さん(教育学部2年)

## 08 Voice of Students

「新大広報」の  
編集を担当



●佐藤夏樹さん(人文学部1年)

## 07 Voice of Students

新大祭を運営し  
磨かれた人間力



●西條和哉さん(工学部2年)

# CONTENTS

## 03 特集 積極的な学びが視野を広げ 人間力を向上させる

# アクティブに 活躍する学生

## 08 授業紹介 - 教育の現場 -

## 09 Enjoy! 学生ライフ 学生の課外活動 &サークル紹介

## 10 シリーズ・対談

## 11 注目される研究報告

## 12 Campus Information

### 『六花』とは…

本誌のタイトルでもある『六花』とは、本学の校章のモチーフである“雪の結晶”を表す言葉。本学の校章は、シンボルマークであった学生章をモチーフに本学名誉教授 小磯 稔氏がデザイン化したものです。



題字  
野中浩俊(のなかひろとし)氏  
新潟大学名誉教授(教育人間科学部)。専門は、書道、富岡鉄斎研究。  
現在は、岐阜女子大学 教授

### Cover Photo

表紙で素敵な笑顔を見せてくれているのは小川 必人さん(法学部1年)と松本愛さん(教育学部1年)。共に「大学生活をアクティブに過ごしたい!!」と考えている1年生。彼らの前には無限の可能性が広がっています。



# The Dynamic Niigata Students.

## 意欲的に副専攻制度を活用



Voice of Students  
03

新潟大学では、意欲ある学生が、自身の学部以外の分野も体系的に学べる「副専攻制度」を全国の大学に先駆けて導入。教育学部3年の鎌田さんは、その制度で、マスメディアを学ぶ「メディア・リテラシー」プログラムを専攻している。「この大学は、自分のやりたいことをより自由に突き詰められると私は思ったんですね。その中で、副専攻制度を通してメディアというものを勉強し始めて——正直、今はメディア系の仕事に強く興味が沸き、就活もそういう方向でスタートしました」。主専攻の教育分野に加え、副専攻でもとらなければいけない授業も多いから日々大変だろうが、「興味があることなので苦じゃないです」と微笑む鎌田さん。「新聞記事を作ったり、映像を制作した

り、実際に新聞社の方に来て頂いているらんなお話を聞いたり、実践的な体験ができています。将来の夢について深く知る機会になっているし、すごく視野も広がるので、(副専攻制度は)とても意義があると感じますよ」。今、まさに夢に向かって突き進んでいる彼女の眼は、実にキラキラと輝いていた。

副専攻で学んだ新聞等でのデータ分析法が、主専攻のテーマである運動疫学の研究にも役立っているという。これもまた副専攻制度のメリットだ



興味があるものを学ぶのは、視野も広がるし、とても楽しいです!

鎌田沙穂さん  
(教育学部3年)

## 多くの人との関わりで充実した学生生活



Voice of Students  
01

工学部4年の松田さんは、今春から自動車メーカーに就職予定。本人いわく、就職活動を開始した約1年前が自分にとっての大きな分岐点だと言う。「工学部では、大学院まで行かないと就職が難しいという声をよく聞きます。だけど、僕はそれは違うと思っていて——大学院に行かなくても凝縮した活動をすれば良い結果も出るはずだと。それを実践しようと、短い時間ながらもいろんなコミュニティに参加し、何でも自分の頭で考えていくことを繰り返して経験値を高めていきました」。実は彼、大学3年までハンドボール部に所属し、「練習は週4〜5日。ほぼ部活一色の日々だった」とか。そして4年になる際に「最後の1年くらい、部活とは違う過ごし方したい」と思い、キャリアセンター学生プロジェ

クト(Cプロ)をはじめ、留学生と話す機会を積極的に設けるなど、みずから学びの場をあちこちに求めていった。学部の研究も「嚙下(えんげ)機能の改善」という難題を歯学部と共同で研究。「そういった様々な人たちとの活動が今につながっている」と振り返る。「いろんなものを見て、その中で自分なりに物事を考えることが大事。そうして経験を積んだおかげで、充実した学生生活が過ごせました」。



学生が主体のプロジェクト「Cプロ」。企業の方を招いて話を聞いたり、内定などの就活経験を後輩に伝えるなどのイベントを行っている

いろんな出会いを見つけられる大学だからそれを活かさない!

松田泰知さん  
(工学部4年)

## 一步踏み出す決意から見たグローバルな視点



Voice of Students  
04



グローバルな視点を持った社会人を目指します

藤崎夏実さん  
(法学部4年)

新潟大学と交流協定を結ぶ中国の清華大学への留学中に撮影。世界遺産の「平遥古城」(へいようこじょう)での集合写真



所属ゼミには海外の留学生が多かったことから、外国文化に興味を持つ機会が増えてきたと語る藤崎さん。海外へ行くことは特別なこと、遠い話と考えていたが、担当教員の勧めもあり、一步踏み出して1カ月間の中国留学も経験した。「サマーセミナーを履修したので、リアルな日常会話が出来たと思います。現地で実際に中国人と接して感じた印象は、それまでにメディアや報道を通して持っていたイメー

ジとはまったく違い、友好的で親切だった。自分の目と体で体験することの重要性を感じました」。こうしてグローバルなコミュニケーションに触れた結果、以前には気付かなかった自分の積極性を発見したと言う。「中国の学生は周りに影響されず自分をしっかりと持って発言できる人が多かった。逆にそこは日本人の苦手な部分。中国での留学を終えて感じたのはもっともっと話せるようになりたいし、自分の気持ちを積極的に表現したいということ。海外で生活したからこそ、日本人の意識や笑顔、サービスに対する考え方、ルールを守った行動は素晴らしいと思う。卒業後は観光やサービス系の職種に内定しているので、その経験を活かしてグローバルな視点を持った社会人を目指します」。

積極的な行動が見識を広げ、自信も付けさせますね



栗林菜月さん  
(法学部4年)

実際の就業現場でも応用可能な会社法についての知識も深めた。「専門書が充実した中央図書館に、よく通い、勉強しました」



## 専門外の講義も積極的に履修



Voice of Students  
02

高校生の頃から政治に興味を持ち、法学部へ入学した栗林さん。国際法について学び、卒業論文では行政手続である退去強制を取り上げた。卒業を間近に控え「視野が広がり、さまざまな知識を吸収した4年間だった」と振り返る。「学生時代にしかできない経験や知識を得たくて専門外の授業も進んで履修しました。自ら積極的に行動すれば、学部の枠に捉われずにさまざまな学びができるプログラムが新潟大学には充実していると思います」。栗林さんが特に力を入れたのは国際問題や交流を取り上げるプログラム。カンボジアで国際協力や援助を受ける国の現状を目の当たりにしたり、韓国の大

学の学生とも交流した。「ゲストとして釜山に行ったり、新潟で韓国の学生さんのホストを務めるなど親交を深めました。そこで実感したのは、外国人と意思疎通をするための心構えや、コミュニケーション力の必要性。語学力はもちろんですが、外国人と実際に関わる場面を学生時代に経験することの重要性を何よりも感じました。こうして専攻分野を越えて経験を積んだ栗林さんは新潟県内の銀行に就職が内定している。「業務を通して学生時代に培ったプレゼン力や交渉力を発揮したい。銀行は企業を支援することで地域貢献もできる魅力的な仕事。大学での4年間を社会で活かしたいと思います」。

# The Dynamic Niigata Students.

## 新大祭を運営し 磨かれた人間力



Voice of Students  
07

学内最大のイベントを企画・運営する新大祭常任委員会。構成員は100名以上。その活動は会場のコーディネートからパンフレットの制作や広報、協賛集め、看板やポスターの設置など多岐に渡る。西條さんは入学後、大学のイベント運営に興味を持ち参加した。「常任委員会の総務部長として学内の団体やサークルと連絡を取り、企画の募集を受け付けました。各方面からの提案をまとめたり、調整が必要な場面では交渉や説明に立ち会ったのが主な仕事。個人や団体との関わり方や意見を伝える力がついたらと思います。また、チームワークの大切さも痛感しました」。業務をスムーズに進めるためにリーダーには適材適所に人材を配置しスケジュールを管理する力が必要だと続ける。

「工学部の実習や実験も手順や準備が大切。仮説を立てて、ある目標に向かって何かを作り上げていく力は無意識のうちに身につけていたのかもしれませんが。新潟大学の講義は専門分野の知識だけでなく、人間力の強化にもつながっていると思います。学生たちのパワーが結集する新大祭という大イベントを無事に終え、達成感を得ることができたのも、自律を重んじる大学のプログラムのおかげです」。



毎年10月に五十嵐キャンパスで行われる新大祭。トークショーやコンサート、サークルなどによる出店やパフォーマンスが行われる。

新大祭を終えた時、  
今までにないほどの  
達成感が得られました



西條和哉さん  
(工学部2年)

## 主体的な活動で 地域振興に貢献



Voice of Students  
05

「大学に入って最初に感じたのは、ただ講義を受けているだけでは座ってばかりの毎日で——これって僕が本当にやりたかったことなのかな、と……。そんな時期にダブルホーム活動の存在を知り、自分から主体的に動いてみようと思ったんです」と語る白井さん。このダブルホームとは、学生が日常生活を過ごす拠点(ホーム)として、自身の学部とは別に、大学の教員が地域と取り組むプロジェクトに参加できるという新潟大学独自の教育プログラム。白井さんは、「阿賀町 愛し隊」と題した、東蒲原郡阿賀町の地域の人々と交流するプロジェクトに参加している。「地域の人と一緒にイベントなどを作り上げ

ていこうですよ。で、終わった後、皆さんから『よかったよ!』とか『楽しかった!!』って言ってもらえたときはすごく嬉しくて(笑)。正直、コミュニケーションをとるのはあまり得意じゃない方だったんですが、地域では自分と年が離れた人と話す機会も多いし、他の学部や違う学年の人といろいろと関わったりもする。そうしてダブルホームで身につけたものが今、学部の研究でも、例えば先生など目上の人と話したりする中で確実に活かされていますね」。新潟大学の理念である「自律と創生」をまさに実践している印象の白井さん。話しながら彼が随所に浮かべる笑顔は、充実した学生生活の証しだと強く感じさせてくれた。

ダブルホームで  
身につけたものを  
学部でも活かしています

白井拓己さん  
(教育学部2年)

阿賀町では、日出谷小学校を中心に小学生たちとのイベントも数多く企画。ボートでの川下りなど自然と親しむ機会も多い



## 『新大広報』の 編集を担当



取材を通して、  
いろんな方や活動と  
出会うのが楽しい!

『新大広報』とは、学生が主体となって企画・編集を行なっている新潟大学のオフィシャル広報誌。年4回発行していて、現在は10名前後の学生編集スタッフが様々な企画を立案し、季節ごとの特集やサークル活動のインタビューなど、学生の目線で新潟大学の魅力を紹介している。まだ1年生ながら、興味があってこの冊子の編集に携わり始めたという佐藤さん。「私、実は文章を書くのは苦手なんです(苦笑)。でも、人の話を聞くことはすごく好き。だから取材を通して、普通のキャンパスライフでは接点のない方や、自分の専門とはまったく違う分野の方と出会うことに魅力を感じて、参加しました。2013年

冬号は『チャレポ!!(Challenge&Report)』というコンテンツで、農学部のサークル『まめっこ』にお邪魔しました。そこでは芋掘りをやったんですよ。それも『新大広報』をやっていたら、体験できなかったことだと思うんです。また「自分の考えた企画が、みんなのアイデアで肉付けされてひとつの記事になるっていうのがすごくうれしい、おもしろい」と、この活動の楽しさを語ってくれた彼女。今後、やってみたい特集は?との問いには「国際交流をテーマにした企画をやりたい。留学を考えている方はもちろん、もっと身近にできる交流があるというのを記事にできたらいいな、と思います」。



芋掘りを体験取材した時の一コマ。「自分の体験したことが形になって人に伝わるのはおもしろいですね。写真は恥ずかしいけど(笑)」

◀『新大広報』

佐藤夏樹さん  
(人文学部1年)

## 自分を再発見した ボランティア活動



Voice of Students  
06

ボランティア活動を学生にコーディネートするサークル「ボランち。」に所属。新潟市内を中心に行われるボランティアの情報をポスターやSNSを通じて広報している。積極的に社会奉仕活動への参加を意識するきっかけになったのは東日本大震災だ。震災を目の当たりにして「自分にできることはないか、少しでも力になりたい」と考えるようになった塩澤さんは振り返る。その「ボランち。」の活動と並行し、新潟市に避難・居住している子どもたちに勉強を教える「コスボ学習支援ボランティア」の代表として、積極的な活動も行っている。「活動を通じて感じたのは、辛い経験をした子どもたちに少しでも勇気を与え、笑顔にすることができた

喜びです。これからも仲間たちと地域に貢献していきたい」。塩澤さんは、ボランティア活動の魅力強調する。「地域や世代を超えた方たちとの交流で、自分の視野が広がり、新しい自分を再発見することができます。そこでの経験は、卒業後も様々な場面で必ず役に立つと思います」。



昨年12月に行われたコスボ学習支援ボランティア企画のクリスマスパーティー。参加者たちによる集合写真。2段目の左端が塩澤さん

地域や世代を超えた  
交流の中には  
様々な発見があります



塩澤大地さん  
(人文学部2年)

学生にとっては、部活に代表される課外活動も大切な青春の1ページですよ! このコーナーでは、そんな部活動を中心とした新大生の活躍をお届けします!!

**CIRCLE PICK UP!** **運動系**

**氷上を熱く駆け抜ける  
アイスホッケー部**



25名の部員が  
目指すのは  
インカレ出場!

↑ウィンタースポーツ経験者や新しいことを  
始めたい人の入部が多いとか

**待望のアイスアリーナが完成  
滑って滑って強くなります!**

「オンシーズンは柏崎市などのアイスリンクで実践的な練習を行い、オフシーズンは体力作りに励んでいます。毎年行っている長野県岡谷市での合宿では、コーチライセンスを持つ方から指導を受けています。アイスホッケー経験者は1名のみですが、初心者でも入部2日目からはどんどん伸び始めますよ。今年からは新潟市のアイスアリーナで練習できます。滑った分だけ強くなれると思うので、インカレ出場を目指して練習していきたいです」



部長 齋藤 潤也さん(農学部4年)

**CIRCLE PICK UP!** **文化系**

**楽しみながら修練を積む  
将棋部**



互いに次の  
展開を読み合う  
対局は真剣勝負!

↑経験者だけでなく初心者からの入部も多い。  
部内は和やかな雰囲気

**先を読む力を磨き  
それぞれが対局に挑む!**

「将棋部は部員が約25名。五十嵐キャンパスの学生会館で週に2回集まり、活動しています。一番の目標は春と秋に行われる北信越大会の優勝ですが、その他にも一般の大会や交流試合にも積極的に参加しています。勝敗を左右する要素には運や勢いもありますが、何よりも実力が問われるところや、楽しみながら頭を使うところが将棋の面白さだと思いますね。対局だけでなく定石の研究も大切にしながら技術を磨いています」



部長 蔵田 栄治さん(工学部2年)

**CAMPUS TOPICS!**

**ダブルホーム活動の成果を発表するシンポジウム**

地域活動や異世代間の交流を通し、社会人に必要とされる基礎力を身につけることができる活動。当日は学生が企画・運営し、活動報告を行った後、地域の方も交えてのグループ討論を行いました。学生が体験した挫折や喜び、地域の方が期待する学生の活動について話し合われました。参加した教職員や地域の方からは「学生の成長を間近で感じた」等の声が寄せられ、盛況で幕を閉じました。



**平成25年度新大キャンパスミーティングが開催されました**

学生と学長が語り合い、魅力ある大学生活の実現に向けた意識の共有化を図る機会。学長の「元気な大学はキミたちが創る!!」と題したプレゼンテーションを受け、5人の学生から、自身の魅力を引き出すことができる授業について「新大の魅力と課題～充実した大学生活のために～」という視点からの発表がありました。その後の全体討論も、活発に意見が飛び交う有意義な時間となりました。



**意欲ある学生が伸び伸びと勉学に勤しむ**

**授業紹介** — 教育の現場 —

**第7回 農学部**

粟生田 忠雄 助教

Profile  
専門は土壌物理学。多機能排水砦と陶管暗渠による農地の土壌水管理システムの開発などについて研究。

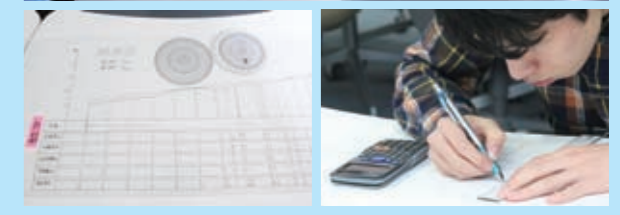


**土木測量学実習**

**日常生活と実習の課題を結びつけること  
それが、優れた技術者になるための力となる**

土木構造物を構築する上で、地盤の情報は不可欠。測量で十分な精度の地盤情報が得られれば、正しい構造物を造ることが可能になる。「地盤情報には、距離や角度で測定したmm単位の精度が求められます。現在は第二期の開講のため、前半は屋外での測量、後半は製図を基本としています」。取材時の課題は道路設計(製図)。コンピュータ製図(CAD)で簡単に製図できる時代でも実習では手描きにこだわっている。「手描き図面の苦勞を経験して初めて図面のバランスやメリハリを理解することができる。優れた技術者になるための素養を涵養しているのです」。学生が実習で身につけた力は卒業後、土木技術コンサルタント、測量会社などで発揮されることが期待できる。「例えば、トンネル工事。測量がしっかりしていないとどんなにすばらしいドリルで山を掘っても貫通しません。また、水平、鉛直方向の曲線が設計速度に見合うようにできていないと交通事故に繋がります。測量実習の課題が日常生活と結びつくようなイメージを配置しています。学生には長さや角度の量と質を理解して、取り扱うことを学んでほしいと思います」。

専門的な知識や技術の修得と、均整の取れた知識の獲得は教育の重要な役割。約5,000科目の中から特色ある授業を紹介。



**STUDENTS VOICE**

「しっかりと時間をかけて、精密な製図を作ることを意識しています。先生や先輩にも質問しやすい雰囲気です。その場で疑問が解決できる環境です(五十嵐)」「卒業後は土木関係に就職を希望しているので、測量や製図について基礎をしっかり身につけようと思います(上村)」



右 五十嵐花奈恵さん(農学部2年)  
左 上村わかさん(農学部2年)

**生物化学実験**

生命・食料科学系列教員担当

**基本的な生体成分の構造などについて  
身近な素材を使った実験を通して学ぶ**

農場や演習林における野外活動のイメージが強い農学部の中で、応用生物化学科は実験室での研究活動が中心。その教育の柱のひとつが学生実験であり、高度で幅広い実験技術習得のために5つの実験科目を必修としている。

生命・食料科学系列教員が担当する「生物化学実験」では、基本的な生体成分であるタンパク質、脂質、炭水化物、核酸の構造や機能、性質、取り扱い方法について、小麦粉や食肉、バター、発芽イネなど身近な素材を使った実験を通して学ぶ。その知識は実際にそれらの物質を取り扱うことで初めて身に付くもの。この実験を通じ、知識と技術を結びつけて考える力の習得を目指している。

実験で取り扱う内容や技術は、私達の生活に関連するものが中心。例えば、実験のひとつに小麦粉から旨味調味料「味の素」の主成分、グルタミン酸ナトリウムを作る実験がある。この実験では、過去、実際に「味の素」で行われていた製法を用いて旨味成分の結晶を作り、最後には完成した結晶を市販の味の素と食べ比べするというもの。楽しみながらタンパク質やアミノ酸、デンプンに関する様々な実験技術を習得できる内容だ。

学生は常に、「今やっている操作は何のための操作なのか?」を意識し、単に実験書に書かれている通りにやるだけでなく、常に考えながら体を動かすことで理解を深めることができる。



**STUDENTS VOICE**

「研究室配属後や卒業後にもつながる実験の基礎を学んでいます。教科書からの学びだけでなく、実践に裏付けられた考察力が身に付きます(金野)」「実験器具の使用手法や作業について分からないところがあったら、先生からその場でアドバイスをいただけます(井出)」



右 金野健一郎さん(農学部2年)  
左 井出夕貴さん(農学部2年)

恩師と語らう懐かしの時代  
**シリーズ・対談**  
 恩師：**花田晃治 名誉教授**  
 教え子：**泉 健次さん 渡部宏一さん**  
**澤田宏二さん・美穂さん**



**皆と一緒に楽しく学び、次の世代をどう育てていくかを考えていました**

**花田** 私は「よく遊び、少しは学べ、学生さんは」でOKだと思ってるんですよ。医師にしても研究者にしても、卒業してその立場になったら忙しい日々を送るわけですから、学生時代くらいはのんびり過ごしてほしいなと。その意味で、今日の皆さんは、部活など学生時代にいろんな時間の過ごし方をしてきた活発な人達って印象なんですね。

**泉** おっしゃる通りで、実はこの中にテニス部のOBが3人もいるって(笑)。私自身もテニス部だったんですけど、

かなりパワーを入れてやってましたからね。

**澤田(宏)** 僕はサッカー部なんですけど、とにかく一生懸命サッカーをやっていた気がします。また、花田先生がサッカー部の監督もされていたので、まさに、さっきの「よく遊び、ちよつと学べ」を実践してましたね(笑)。花田先生はそういうチームワークが大切な場をたくさん作られていたのですね、楽しい思い出はいろいろありますよ。

**渡部** 冬場は花田先生も一緒に、みんなでスキーをやったりとかね(笑)。

——なるほど。しかし歯学部の方々の話ばかりで(笑)……

**花田** いいんじゃないですかね

(笑)。というのは、これが通常の会社なら組織なり団体で動いていくわけですけど、歯科医師の場合は、仕事に就いたら皆、一人ですからね。だから、その前にコミュニケーションをとるような活動も絶対にやっておいた方がいいと僕は思っています。

**澤田(美)** 実際、一年生の最初の合宿で、花田先生から「歯科医師になるにあたって、人とのつながりを持たなければいけないし、歯科医師には体力も必要! だから運動部に入りなさい」と言われたんです。で、私はそれまでずっと文化部オンリーだったところを、テニス部に入ろうと決めて——もう(日焼けで)真っ黒になりながら学生時代を過

ごしたという。全て花田先生の言葉から始まりましたね。

**渡部** 先生との出会いで言うと、まず強烈だったのが、1年生のとき、歯学祭で、神輿に乗った金冠のインカ帝国の王が出てきたんですよ。で、その金髪の人が髪をかき分けたら花田先生の顔が見えて「何だ、このおじさんは?」って(笑)。後で聞いたら、何でも、学園祭の余興として矯正科が乱入したようなんですが……

**花田** もうね、楽しいことは大好きですから!(笑)

——ところで、学業面での花田先生の思い出は?

**泉** まだ矯正の開業歯科医院が多くなかった頃で、歯の矯正というものに魅力を感じていた学生は皆、花田先生の講義が楽しみで、熱心に聴いていたんです。にもかかわらず、定期試験では花田先生のジョークの利いた超難問に、試験室の空気が凍りついたこともありました。それでも先生の授業を慕わない学生はいませんでしたよ。

**澤田(宏)** また、花田先生の授業の教科書って、イラスト入りのオリジナル仕様で、それもおもしろいって思っています。黒いのがいいかと思って、自前の教科書を作ろうと。確か400

ページの原稿を全部自分で作り、発売されたばかりのワープロで打って。

**澤田(宏)** かなり厚手のものでしたよね?

**渡部** そうそう。僕は今でもすぐ出せる場所に置いてありますよ。さすがにもうボロボロですけどね。



から、私もそうだし、皆さんも同じように楽しい学生時代を過ごしていて、今こうして当時を楽しく話せるっていうのはすごく嬉しいなと。で、今度皆さんに次の世代の歯科医師をしっかり育ててほしいと思いますね。



新潟大学の特色ある  
 研究トピックを紹介

**注目** される研究報告

火山性堆積物の拡散過程を現在から  
 数百万年の単位で明らかにする

噴火自体だけではなく、噴出した火山物質がさまざまな要因により地球表面を移動、堆積していく過程を研究。「堆積物がどのくらいの期間とどのような過程を経て周辺地域に拡散していくのか。それらを現在起こっている現象はもろろん、地層を数百万年のスケールで読み解くことで長期的な変化も明らかにしていきます。火山土砂は噴出後、規模にもよりますが短くて10年、長ければ100年以上のスケールで表層の環境に影響を及ぼし続けます」。地表に余剰に堆積した火山物質が洪水や豪雨により流され、引き起こされる土石流も広

義では火山災害。大規模なものでは火山から100〜300kmの距離まで流れ下ったことも地層から理解できる。「地層はどのくらいの火山灰が積もり、土砂が流れてきたのかの記録。火山物質による堰き止め湖の決壊、融雪による泥流など、噴火の種類や地形条件によってさまざまですが、今後、同じ場所もしくは類似する地域で同様の噴火が起こった際、発生しうる災害が予測できます」。また、火山は災害を引き起こす一方、地球規模のダイナミックで魅力的な現象であり、私たちの生活にプラスの側面ももたらしていると言う。「火山物質が堆積すると耕作地に適した平坦で住みやすい場所ができます。噴火後の土地に遺跡の数が増えた記録もある。人類には自然現象と常に戦い利用してきた歴史があるんですね。温泉地や観光地が好例。特に日本は火山国ですから、気候変動や海面変動、土地の隆起以外に、火山が地層や地表の形成に果たしてきた役割を解明することは重要だと思います」。

**研究課題** 火山噴火後の火砕物質  
 移動堆積現象とその災害



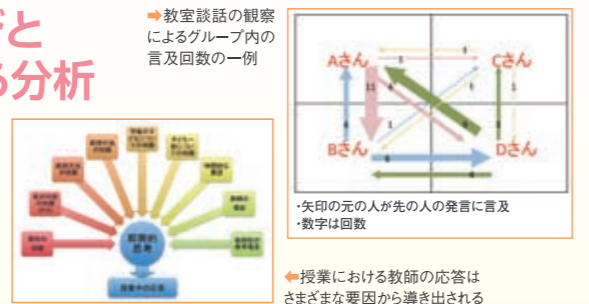
**研究課題** 授業における子どもの学びと  
 教師の支援を教室談話から分析

人文社会・教育科学系(教育学部) 一柳智紀 准教授

教育現場の多様性に応じて  
 個々の状況を見極める視点を提示



子どもが学び理解を深める時、教室内ではどのようなやりとりが行われ、教師はどのような言葉をかけているのか。実際の教育の現場、特に小学校の授業中に交わされる具体的な言葉やジェスチャーなどの教室談話を観察分析する。「小グループでひとつの課題に取り組む様子を見ると、課題によってやりとりがガラリと変わることが分かります。質問や反論、同意の内容や解決へのプロセスに変化が



え表現していく授業が求められる現代の教育。純粋に学ぶ楽しさに触れている小学生と教師の姿は感動的であると語る教授。「年齢が低いからこそ彼らの成長における教育の重要性を感じます。子どもの理解はどうすれば深まり、それが周囲の子どもに有効に影響していくのかを見極める視点が重要なのです」。



新潟大学では、伝統的な学問分野を継承するとともに、専門分野を超えて連携し合う研究や、先端的な研究など、真理探究や社会の発展に貢献する研究を行っています。

# Campus Information

地域に密着しながらさまざまな活動が続ける新潟大学。皆さんにお伝えしたいニュースはたくさんあります!



## 平成25年度 新潟大学・全学同窓会交流会の開催

平成25年10月26日(土)、毎年恒例の新潟大学と全学同窓会との交流会がANAクラウンプラザホテル新潟で開催されました。交流会には、200人を超える同窓生や教職員、一般市民の方々に参加していただきました。

当日は、本学経済学部4年生が就職活動に関する体験談を発表した後、森 正勝氏(国際大学名誉教授、昭和44年人文学部卒)から「成長戦略と人財育成」と題した講演があり、参加者との間で活発な質疑応答が行われました。

引き続き行われた懇親会では、全学同窓会「雪華支援事業」の贈呈式や人文・法・経済学部卒業生有志による「四季の新潟」の大合唱が行われました。また、学生サークル「MUSE」による見事なアカペラが披露され、会場全体が若さ溢れる歌声に聞き入っていました。同窓生同士が思い思いに語り合う姿が随所で見受けられ、学生時代にタイムスリップしたかのような和気あいあいとした雰囲気に終始包まれていました。

今後も毎年秋に開催することとしていますので、多くの卒業生、在学生の他、市民の皆様のご参加もお待ちしております。



## 「新潟大学カード」入会受付中!

VISA付きの国際カード「新潟大学カード」。  
卒業生と母校の絆を、いつもポケットに!

- 新潟大学カードに関するお問い合わせ先

新潟大学全学同窓会事務局

電話:025-262-7891  
(受付時間 平日10:00~15:00)

E-mail:n-doso@adm.niigata-u.ac.jp

入会受付中



## 冬の風物詩 -ウインターイルミネーション-

今年で7回目となる医歯学総合病院前のウインターイルミネーション。夜空に灯る暖かい光で、患者さんや来院される方の心が癒されることを願って毎年設置しています。

- ※1 このイルミネーションは、LED電球を使用及び点灯時間の短縮により、冬季の節電に配慮しています。
- ※2 点灯は平成26年1月13日で終了しました。



## 新潟大学基金のお知らせ ぜひご協力ください

学生の修学支援、国際交流活動等に活用しています。

※税法上の優遇が受けられます

- 基金ホームページ

<http://www.niigata-u.ac.jp/kikin/index.html>

新潟大学基金事務局

電話:025-262-5651 (受付時間 平日9:00~17:00)

FAX:025-262-6679 E-mail:kikinjimu@adm.niigata-u.ac.jp



新潟大学 季刊広報誌 **六花** RIKKA No.7  
2014.Winter

発行/平成26年2月

編集/新潟大学広報センター

(新潟市西区五十嵐2の町8050番地)

電話/025-262-7000 FAX/025-262-6539

Home Page <http://www.niigata-u.ac.jp/>

E-mail [rikka@adm.niigata-u.ac.jp](mailto:rikka@adm.niigata-u.ac.jp)

## 編集後記

特集では、アクティブな活動をしている学生取材しました。自分の興味・関心のある分野を追究する姿にとっても刺激を受けました。いつどこに「興味を持つキッカケ」が落ちているかわからない——。目を輝かせ、いきいきと話す学生の姿に、興味のあることには積極的に挑戦しなご! と改めて思わせる冬の昼下がりでした。(YAK)

リサイクル適性(A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。